『ウルトラマンマックス』：未完のプロジェクト

田畑　雅英・山﨑　鎮親

ULTRAMAN MAX：An Unfinished Project

Masahide TABATA / Yasuchika YAMAZAKI

"Ultraman Max" is a 2005 TV drama and part of the Ultraman series. The history of Ultraman began with "Ultraman" in 1966 and continues to. "Ultraman Max" is considered a turning point in this history. This paper aims to clarify the meaning of the "return to origin" in "Ultraman Max". The focus is then placed on the world structure and production system of "Ultraman Max". "Ultraman Max" has five characteristics. 1) In "Ultraman Max", Ultraman comes from the M78 Nebula. 2) In "Ultraman Max", past Ultraman do not generally appear.
3) In "Ultraman Max", the main characters of "Ultraman" and "Ultraseven" appear in different roles. 4) In "Ultraman Max", kaiju and aliens that appeared in past Ultraman works appear. 5) Many scriptwriters and directors participated in "Ultraman Max". And with the "return to origin", "Ultraman Max" expanded the world of the Ultraman. As an unfinished project, its significance can be found in the Ultraman that followed.

Keywords: Ultraman, Ultraman Max, return to origin, production system, unfinished project

1．「銀河の彼方」から

本稿では、ウルトラマンのテレビシリーズの中から『ウルトラマンマックス』を取り上げる。

ウルトラマンの歴史は1966年のテレビドラマ『ウルトラマン』に始まる。このドラマはM78星雲から地球にやってきたウルトラマンが人類と共に怪獣や宇宙人と戦うという物語であった。その後、テレビシリーズとしては1980年の『ウルトラマン80』で一旦その歴史が途切れたが、1996年『ウルトラマンティガ』でウルトラマンが復活する。『ウルトラマンティガ』は、M78星雲出身のウルトラマンではない、新しく生まれ変わったウルトラマンの物語であった。それからしばらくはM78星雲出身ではないウルトラマンの路線が続いた。そして2005年7月、M78星雲出身のウルトラマンが25年ぶりに誕生した。ウルトラマンマックスである。M78星雲という設定に着目したとき、『ウルトラマンティガ』がウルトラマンの第一の転換だとすれば、『ウルトラマンマックス』は第二の転換と呼んでよいのかもしれない。『ウルトラマンマックス』は「原点回帰」を目指したといわれる。以下、『ウルトラマンマックス』について、その特徴および「原点回帰」の意味について考察していく。

２．マックス、マックス、マックス　ウルトラ５つの特徴

『ウルトラマンマックス』の企画作業は2004年12月に始まった（八木毅編2021a 11頁）。当時円谷プロダクションに所属していた八木毅（『ウルトラマンマックス』のプロデューサー、シリーズ構成担当）、脚本家の小林雄次、脚本・監督の梶研吾の三名で企画づくりが進められた。翌2005年２月、映画監督の金子修介が参加する。八木曰く「ガメラもゴジラも撮られた日本一の怪獣映画の監督」（八木毅編2021a 18頁）であり、円谷プロダクション制作の2004年の『ウルトラQダークファンタジー』にも関わった金子は『ウルトラマンマックス』第１話第２話の監督を要請され、企画づくりの作業にも加わっていく。そして金子の発案を基に、ウルトラマンマックスはM78星雲出身と設定された。

八木　２月８日ですから、最初の企画書はある程度できていたと思うんですよね。
金子　そのときはもう『ウルトラマンマックス』だった？
梶　　いや、まだじゃないかな。
八木　金子監督が入られてから、M78星雲という設定にしたいとかいろいろ変更したところがありましたしね。
梶　　そうそう。監督が入られてから、かなり決まりましたから。（八木毅編2021a 70頁）

かくして、主人公トウマ・カイト（演：青山草太）と彼が変身するウルトラマンマックスが対怪獣防衛チームDASHとともに怪獣や宇宙人と戦う物語、『ウルトラマンマックス』が誕生した。

表　ウルトラマン・テレビシリーズ（各作品の話数は特別編を除いた放映回数）

作品タイトル	放映開始年	全話数	出　自	歴代ウルトラマン登場	過去作品の怪獣/宇宙人
ウルトラマン	1966年	全39話	M78星雲		あり
ウルトラセブン	1967年	全49話	M78星雲		
帰ってきたウルトラマン	1971年	全51話	M78星雲	あり	あり
ウルトラマンA	1972年	全52話	M78星雲	あり	あり
ウルトラマンタロウ	1973年	全53話	M78星雲	あり	あり
ウルトラマンレオ	1974年	全51話	（M78星雲）	あり	
ウルトラマン８０	1980年	全50話	M78星雲	あり	あり
ウルトラマンティガ	1996年	全52話			
ウルトラマンダイナ	1997年	全51話			あり
ウルトラマンガイア	1998年	全51話			
ウルトラマンコスモス	2001年	全65話			
ウルトラマンネクサス	2004年	全37話			
ウルトラマンマックス	2005年	全39話	M78星雲		あり
ウルトラマンメビウス	2006年	全50話	M78星雲	あり	あり
ウルトラマンギンガ	2013年	全11話		あり	あり
ウルトラマンギンガS	2014年	全16話		あり	あり
ウルトラマンX	2015年	全22話		あり	あり
ウルトラマンオーブ	2016年	全25話		あり	あり
ウルトラマンジード	2017年	全25話	（M78星雲）	あり	あり
ウルトラマンR/B	2018年	全25話		あり	あり
ウルトラマンタイガ	2019年	全25話	M78星雲	あり	あり
ウルトラマンZ	2020年	全25話	M78星雲	あり	あり
ウルトラマントリガー	2021年	全25話		あり	あり
ウルトラマンデッカー	2022年	全25話		あり	あり
ウルトラマンブレーザー	2023年	全25話			あり
ウルトラマンアーク	2024年	全25話		あり	あり

※『ウルトラマントリガー』の正式名称は『ウルトラマントリガー NEW GENERATION TIGA』。
※歴代ウルトラマンとは過去作のウルトラマンを指す。実体が登場しなくても、カードやメダルなどアイテムとして登場する場合も含んでいる。オーブ、R／B、Zなどがそれにあたる。
※『ウルトラマンレオ』は獅子座L77星出身だが、ウルトラセブンと強い関わりがあり（M78星雲）とした。
※『ウルトラマンジード』は副主人公のウルトラマンゼロがM78星雲出身なので（M78星雲）とした。
※『ウルトラマン』に登場する過去の怪獣は1966年『ウルトラQ』の「海底原人ラゴン」「ケムール人」を指す。
※『ウルトラマンコスモス』に登場する「ガラモン」は『ウルトラQ』のガラモンとは別と判断した。

さて、『ウルトラマンマックス』には大きく五つの特徴がみられる。

特徴１　『ウルトラマンマックス』にはM78星雲出身のウルトラマンが登場する。
特徴２　『ウルトラマンマックス』には歴代のウルトラマンは基本的には登場しない。
特徴３　『ウルトラマンマックス』には『ウルトラマン』『ウルトラセブン』の主役が別の役で登場する。
特徴４　『ウルトラマンマックス』には過去のウルトラマン作品の怪獣や宇宙人が登場する。
特徴５　『ウルトラマンマックス』には多くの脚本家と監督が参加している。

『ウルトラマンマックス』の特徴を他のウルトラマン作品と比べるために一覧表「ウルトラマン・テレビシリーズ」を作成した。表は地球を舞台にして人類と共に戦う実写の連続テレビドラマ作品を時系列順に並べ、放映開始年、話数、M78星雲出身かどうか（特徴1）、歴代ウルトラマンの登場の有無（特徴2）、過去作品の怪獣や宇宙人の登場の有無（特徴4）の項目立てで整理している。なお、ミニドラマ1999年『ウルトラマンナイス』、深夜ドラマ2007年『ULTRASEVEN X』は外した。

特徴１『ウルトラマンマックス』にはM78星雲出身のウルトラマンが登場する。

ウルトラマンマックスはM78星雲からやってきたと設定された。M78星雲出身のウルトラマンはテレビシリーズでは1980年『ウルトラマン80』以来25年ぶりであった。1996年の『ウルトラマンティガ』以降2004年の『ウルトラマンネクサス』までのウルトラマンたちはみなM78星雲出身とはいえず、M78星雲との関係も明示されていない。ウルトラマンティガ（1996）ははるか古代に宇宙から飛来した光の巨人、ウルトラマンダイナ（1997）は出自不明の光の巨人、ウルトラマンガイア（1998）は地球が生み出したと推測される巨人、ウルトラマンコスモス（2001）は宇宙から来た巨人だがM78星雲かは不明、ウルトラマンネクサス（2004）は宇宙からきた巨人だが出身地は不明とみられる。

『ウルトラマンマックス』では、マックス自身が自分はM78星雲から来たと説明する。第１話「ウルトラマンマックス誕生!」で、怪獣の攻撃を受け絶体絶命となったトウマ・カイトは謎の光に包まれ、そこで巨人と出会う。トウマの前に現れた巨人は「私は、君たちがM78星雲と呼ぶ別の銀河系からやってきた」と自己紹介する。M78星雲出身と自己紹介するのは初代ウルトラマンと同じで、1966年『ウルトラマン』第1話「ウルトラ作戦第1号」では自己紹介場面はこうなっていた。

赤い光球の中で目をつむったまま仰向けに横たわるハヤタ隊員の前に銀色の巨人に立っている。
ハヤタ　「きみはいったい何者だ」
巨人　　「M78星雲の宇宙人だ」

ウルトラマンマックスは「M78星雲から来た」と話し、初代ウルトラマンは「M78星雲の宇宙人だ」と話す。ここから『ウルトラマンマックス』は1966年最初の『ウルトラマン』とのつながりがあるように思われてくる。しかしながら、マックスのM78星雲とウルトラマンのM78星雲を同一とするのは案外むずかしい。というのも、特徴２、特徴３を踏まえると、同一ではない可能性が浮かび上がってくるからだ。『ウルトラマンマックス』の世界観は1966年の最初の『ウルトラマン』からの流れとは同じではないという指摘がすでにある。切通理作は「ウルトラマンマックスはM78星雲の出身

でありつつ、過去の「ウルトラマンシリーズ」とはパラレルな世界観」（切通2021）の作品としている。「パラレルな世界観」は、ただちに二つのM78星雲が「パラレル」だということを意味するわけではないが、少なくとも『ウルトラマンマックス』のM78星雲が一筋縄ではいかないことを暗示している。

特徴２『ウルトラマンマックス』には歴代のウルトラマンは基本的には登場しない。

ウルトラマンマックスはM78星雲の出身のウルトラマンと設定された。とはいえ、『ウルトラマンマックス』には、初代ウルトラマンをはじめとするM78星雲の歴代ウルトラマンたちは登場しない。ウルトラセブンもウルトラマンジャック（帰ってきたウルトラマン）もウルトラマンＡもウルトラマンタロウもウルトラマン80も登場しない。ウルトラマンレオも登場しない。その一方で、ウルトラマンゼノンという初お目見えのウルトラマンが第13話「ゼットンの娘」と最終回に登場する。ウルトラマンゼノンは『ウルトラマンマックス』限定のウルトラマンのようで、他のウルトラマン作品には登場しないし、テレビシリーズではマックス以外のウルトラマンとの共演はない。

『ウルトラマンマックス』の後番組『ウルトラマンメビウス』は『ウルトラマン』40周年を飾る作品として制作された。『ウルトラマンメビウス』は1966年『ウルトラマン』から1980年『ウルトラマン80』までの歴史を引き継いだ世界観の物語であり、M78星雲の歴代ウルトラマンたちが登場する。しかし、不思議なことにM78星雲出身のウルトラマンマックスは登場しない。

ウルトラマンマックスのM78星雲はどこのM78星雲なのだろうか。こう問われたら、切通のいう「パラレルな世界観」にしたがって、ウルトラマンマックスは初代ウルトラマンたちとは別の宇宙のウルトラマンと設定されたのであり、マックスのM78星雲は平行する別の時空のM78星雲なのだと考えればよい。そして、『ウルトラマンマックス』の世界観では、物語の舞台は他のウルトラ作品とはパラレルな時空にあると設定されたとすればこの問題は解決する。

しかし、これにて一件落着、とはならない。この「パラレル」はなかなかの曲者で、『ウルトラマンマックス』は平行宇宙のウルトラマンを描いた物語だとはそう簡単には言い切れない。なぜか。

まず一点目。『ウルトラマンマックス』第24話「狙われない街」は1967年『ウルトラセブン』第８話「狙われた街」の続編とされる。ウルトラセブンの登場場面もマックスとセブンの共演場面もないのだが、飛んできたアイスラッガーがメトロン星人の背中を斬るという「狙われた街」のカットが使われている。「続編」だとすれば、あくまでウルトラマンの世界の中の話なのだが、第24話において『ウルトラマンマックス』の時空は『ウルトラセブン』の時空と接続したことになる。

二点目。2015年の『ウルトラマンＸ』第８話「狙われたＸ」（脚本：林壮太郎、監督：アベユーイチ）にウルトラマンマックスと彼が変身したトウマ・カイトが登場する。「狙われたＸ」では、スラン星人（『ウルトラマンマックス』第4話に登場した宇宙人と同族）がトウマの顔をした当麻博士に化けて大空大地（『ウルトラマンＸ』の主人公）のいる地球防衛の組織Xioに技術支援のためにやってくる。それはスラン星人の計略であり、大空大地と彼が変身するウルトラマンＸは罠にはまり、スラン星人が操る宇宙恐竜ゼットンの襲撃に危うくなる。その時DASHの隊員姿のトウマ・カイトが現れ当麻博士の正体を暴き、大地とＸを助けるためにウルトラマンマックスに変身する。マックスの姿を見た防衛組織特別顧問のファントン星人グルマン博士は「あれはウルトラマンマックス」とつぶやく。グルマン博士のいる『ウルトラマンＸ』の時空にはウルトラマンマックスが存在していることになる。ウルトラマンマックスの時空と『ウルトラマンＸ』の時空はこのとき混ざり合う(1)。

「パラレルな世界観」「狙われない街」「狙われたＸ」、これらを受け止めたとき、ウルトラマンマックスのいる時空は「不思議」で複雑で難解なものとなる。ウルトラマンマックスの時空はM78星雲出身のウルトラマンたちの時空と「パラレル」な位置にありつつ、他のウルトラマンたちの時空と接続することもあるとなる。

特徴３『ウルトラマンマックス』には『ウルトラマン』『ウルトラセブン』の主役が別の役で登場する。

『ウルトラマンマックス』には、過去のウルトラマンは登場しないが、ウルトラマンに変身する人

間を演じた俳優が別の人間の役で出演している。1966年『ウルトラマン』でウルトラマン＝ハヤタを演じた黒部進、1967年『ウルトラセブン』でウルトラセブン＝モロボシダンを演じた森次晃嗣がそれにあたる。『ウルトラマンマックス』では黒部進はハヤタではなく、トミオカ長官役でレギュラー出演している。森次晃嗣は一話限りの客演（第19話「扉より来たる者」）でトミオカ長官の後輩のオザキタケルを演じている。黒部進演じるトミオカ長官はウルトラマンに変身しない。森次晃嗣演じるオザキタケルもウルトラセブンに変身はしない。思わせぶりな仕草をする場面はあるが、トミオカ長官もオザキタケルも普通の人間であり宇宙人ではない。

『ウルトラマン』『ウルトラセブン』に親しんだ視聴者からすればどうだろうか。というのも、黒部進と森次晃嗣は、1971年『帰ってきたウルトラマン』1973年『ウルトラマンタロウ』ではそれぞれハヤタ役、モロボシダン役で客演していたからだし、加えて森次は1974年『ウルトラマンレオ』ではモロボシダン役でレギュラー出演していたからだ[(2)]。ウルトラマン作品世界では、黒部進＝ハヤタ、森次晃嗣＝モロボシダンというのは固定観念のように存在する。

黒部進は『ウルトラマンマックス』でハヤタとは別人であるトミオカ長官役のオファーを受けてよいか悩んだこと、自分がハヤタとして親しまれているがゆえにハヤタとは違う役を演じることでファンが混乱するのではないかという疑問があったこと、撮影中もしばらくはその疑問が続いたことを後に述べている（八木毅編2021a 251頁）。黒部進にとってもファンにとっても黒部進はハヤタであり、そのことは森次晃嗣にもあてはまるだろう。黒部進と森次晃嗣の配役は『ウルトラマンマックス』が『ウルトラマン』『ウルトラセブン』とは直接つながらない別の世界の話であることを示している。

『ウルトラマンマックス』には、黒部進と森次晃嗣以外にも、過去のウルトラマン作品の俳優の出演があった。1966年『ウルトラマン』からは、科学特捜隊のフジアキコ隊員役の桜井浩子がヨシナガ教授役で『マックス』にレギュラー出演し、科学特捜隊のイデ隊員役の二瓶正也がダテ博士役で準レギュラー出演している。黒部、桜井、二瓶が並べば『ウルトラマン』のレギュラーのうち三名がそろう。企画作成の比較的初期の段階で1966年『ウルトラマン』の数十年後を舞台にした続編というアイデアがあったことが関わっていたという（宇宙船編集部2006）。ちなみに第33話には科学特捜隊のアラシ隊員役の毒蝮三太夫（石井伊吉）が警備員役で特別出演し、第33、34話には『ウルトラマンレオ』の主人公おおとりゲン役だった真夏竜が警察官役で客演している。

第29話「怪獣は何故現れるのか」（脚本：小中千昭、監督：村石宏實）では1966年の『ウルトラQ』の主人公万城目淳役の佐原健二、戸川一平役の西条康彦が出演している[(3)]。第29話では40年前に特撮テレビドラマ『ＵＮＢＡＬＡＮＣＥ』（『ウルトラQ』の改題前の実際のタイトル）の撮影現場に出現した怪獣が現代の東京に現れる。かつて『ＵＮＢＡＬＡＮＣＥ』の主人公を演じ現在はSF作家となった佐橋健二（演：佐原健二）は40年前の怪獣との遭遇を思い起こす。やはり出演者で今は喫茶店のマスターをしている西郷保彦（演：西条康彦）もかつての出来事を振り返る。第29話は『ウルトラQ』（『ＵＮＢＡＬＡＮＣＥ』）とその出演者を軸に過去と現在が交錯するつくりになっている。

『ウルトラマンマックス』の世界では過去の作品の登場人物たちが別の人間として別の名前で別の人生を歩んでいる。同時に、出演俳優を介して『ウルトラマンマックス』と『ウルトラQ』『ウルトラマン』『ウルトラセブン』とを想像的に結びつけることができるという効果も持っていた。

特徴４『ウルトラマンマックス』には過去のウルトラマン作品の怪獣や宇宙人が登場する。

『ウルトラマンマックス』にはそれまでの歴代ウルトラマンは登場しないが、『ウルトラマン』『ウルトラセブン』の怪獣や宇宙人は登場する。『ウルトラマン』からはアントラー、ゴモラ、ピグモン、レッドキング、ゼットン星人、ゼットン、バルタン星人、『ウルトラセブン』からはエレキング、ピット星人、キングジョー、メトロン星人が登場する。過去作品の怪獣や宇宙人の登場は子どもの頃ウルトラマンに夢中になった世代へのアピールと考えることができるが、それだけにとどまらない意味がある。『ウルトラマンマックス』は過去のウルトラマン作品の怪獣や宇宙人の封印を解いたと考えることができる。

1996年『ウルトラマンティガ』から2004年『ウルトラマンネクサス』までの間、1997年『ウルトラマンダイナ』でのゴルザⅡ（初登場作品は『ウルトラマンティガ』）を除いては過去の怪獣や宇宙人は登場しなかった。『ウルトラマンティガ』以降M78星雲出身ではない「新しいウルトラマン」の路線がしばらく続いたことからすれば、世界観が異なる『ウルトラマン』から『ウルトラマン80』までの怪獣や宇宙人の登場がなかったことは理解できる。しかし、それは『ウルトラマン80』までに登場した怪獣や宇宙人を封印したことにもなる。だとすれば『ウルトラマンマックス』は『ウルトラマン80』の怪獣や宇宙人の封印を解いたとなる。しかし、封印を解くことはウルトラマンマックスの時空と他のウルトラマンたちの時空との関係を複雑なものにもした。その事例を二つあげてみる。

その１、アントラーの場合。『ウルトラマンマックス』第11話「バラージの預言」（脚本：尾崎将也、監督：金子修介）は、4000年前中央アジアにあった王国バラージを破壊した怪獣アントラーが現代の東京に現れ、DASHとウルトラマンマックスはアントラーに苦戦する。しかし最後に、ノアの神がバラージに授けたという青い石を用いてアントラーを撃退するという話であった。この話には1966年『ウルトラマン』第7話「バラージの青い石」（脚本：南川竜、金城哲夫、監督：野長瀬三摩地）とのつがなりがみえる。「バラージの青い石」にもバラージ、アントラー、ノアの神、青い石が登場する。「バラージの青い石」は、中近東の砂漠で5000年前に栄えた古い言い伝えの町バラージに迷い込んだ科学特捜隊がバラージの民と出会い、5000年の昔からバラージに襲来するアントラーにウルトラマンとともに立ち向かうが苦戦し、最後にバラージの守り神ノアの石像が握る青い石を用いてアントラーを倒すという話であった。また、「バラージの青い石」では守り神ノアの姿がウルトラマンにそっくりで、ノアの石像をみた科学特捜隊のアラシ隊員が「5000年の昔、ウルトラマンの先祖は地球上に現れ、その時もやはり人類の平和のために戦っていたのか……」とつぶやく場面があり、「バラージの預言」のラストには青い石が包んであった布に描かれた伝説のノアの神の姿を見てトウマが「ノアの神ってウルトラマンのことだったのかな」とつぶやく場面があった。

「バラージの預言」と「バラージの青い石」は響き合う。バラージ、アントラー、ノアの神、青い石は「バラージの青い石」を指している。そして、アントラーの出現、苦戦するウルトラマンマックス、ノアの青い石による撃退という展開は「バラージの青い石」と同型となっている。『ウルトラマンマックス』第11話の物語は『ウルトラマン』第7話の物語とたしかに結びつく。

その２、メトロン星人の場合。『ウルトラマンマックス』第24話「狙われない街」（脚本：小林雄次、監督：実相寺昭雄）にはメトロン星人が登場する。「狙われない街」は『ウルトラセブン』第8話「狙われた街」（脚本：金城哲夫）の監督であった実相寺自身からその続編を作りたいという希望が出され実現した（宇宙船編集部2006. 八木毅編2021a 56頁）。

「狙われた街」の話の中では、薬物を用いて人間を凶暴化させ人間同士を争わせ自滅させる作戦を実行していたメトロン星人が、作戦を阻止され、最後にウルトラセブンのアイスラッガーにより背中を斬られ撃破された。他方、「狙われない街」の話では、撃破されたはずのメトロン星人は少年に助けられ、背中の傷を怪獣着ぐるみ職人の手で縫い合わせてもらい、怪獣の着ぐるみが保管されている「怪獣倉庫」に40年間潜伏していた。そして、地球の人類にあきれ果て、帰還を決意。最後はトウマ・カイトとのじゃんけん勝負に勝ち、地球を去って行った。「狙われない街」では「狙われた街」の映像が使用され、映像によっても続編であることが主張される(4)。シリーズ構成の八木は「狙われない街」について、「『マックス』は何でもありで、黒部（進）さんや桜井さんが出てきても『ウルトラマン』の続編ではなかった。でも、「狙われない街」だけは「セブン」の正当な続編です。当時の映像をつかっていますから、世界がつながっているんです」（八木毅編2021a 231頁）と述べている。

「バラージの預言」と「狙われない街」は怪獣アントラーとメトロン星人の封印を解いただけでなく、『ウルトラマンマックス』とは異なる世界の話であったはずの『ウルトラマン』『ウルトラセブン』とのつながりや重なりの回路を開放した。

特徴５『ウルトラマンマックス』には多くの脚本家と監督が参加している。

『ウルトラマンマックス』の制作にはきわめて多くの脚本家と監督が参加した。脚本家は18名、監督は11名を数える。なお、1966年『ウルトラマン』は全39話で脚本家は11名、監督は６名。1996年の『ウルトラマンティガ』（全52話）は脚本家16名、監督11名であった。

『ウルトラマンマックス』の脚本担当は三つに分けられる。『ウルトラマンティガ』から『ウルトラマンコスモス』までで担当経験のある脚本家（小林雄次・梶研吾・太田愛・川上英幸・小中千昭・林壮太郎)、『ウルトラマン』『ウルトラセブン』の経験のある脚本家（上原正三・千束北男（飯島敏宏)・藤川桂介)、『ウルトラマンマックス』が初めてのウルトラマン作品となる脚本家（大倉崇裕・尾崎将也・金子二郎・黒田洋介・高木登・たけうちきよと・中島かずき・NAKA雅MURA・福田卓郎)。『マックス』が初めてという脚本家たちを「新世代」とすれば、脚本担当は三つの世代で構成されていた。同様に監督陣も、「平成ウルトラマン」世代（八木毅・梶研吾[5]・高野敏幸・村石宏實[6])、『ウルトラマン』『ウルトラセブン』世代（飯島敏宏・実相寺昭雄)、『ウルトラマンマックス』が初めてのウルトラマン作品となる世代（金子修介・佐藤太・栃原広昭・三池崇史・村上秀晃）の三つに分けられる。なお、飯島敏宏と実相寺昭雄は『ウルトラマンティガ』でも監督を務めている。

監督や脚本家たちの間にはそれぞれのもつウルトラマン像の違いはなかったのだろうか。あったとしても、『ウルトラマンマックス』では違いやずれを統制的に調整する方向ではなく、監督や脚本家の個性や志向を活かす「作家主導」という方針で制作が進められたという（宇宙船編集部2006 49頁参照)。八木によれば「TV作品にはプロデューサーが内容をコントロールするプロデューサーシステムと、緩やかな縛りだけを作って作家に任せてしまう作家主義で作るディレクターズシステムの2つの作り方があり」(宇宙船編集部編2006 49頁)、『ウルトラマンマックス』の制作方針は「作家主導」の「ディレクターズシステム」であった。そしてこの方針のもと『ウルトラマンマックス』には多種多様な話が並ぶことになった。「１クールを過ぎて、『マックス』は本来目指していた理想型へ突き進んでいく。脚本家が描きたいストーリー、演出家が描きたい世界、さまざまな個性が塊となって『マックス』の世界を構築していった」(宇宙船編集部2006 50頁)。八木はいう。「それぞれが作りたいなと思うものを形にしているんです」(宇宙船編集部2006 50頁)[7]。

実相寺昭雄の「狙われない街」が生まれた背景にはこうした方針の存在があった。『15年目の証言録』の中の「狙われない街」の紹介で八木はこう書いている。「24話では『マックス』の作品世界が『ウルトラセブン』の作品世界から時系列で直接の続編世界となっています。不思議ですね。でも、本当です。そんなこともあるのです。それが『マックス』です」(八木毅編2021a 187頁)。

『ウルトラマンマックス』の制作においては、「バラージの預言」「狙われない街」「怪獣は何故現れるのか」にみられるように、異なる作品の世界を連結させることをよしとするような「自由さ」があったと考えられる。そして「自由さ」のもとでは、ウルトラマンマックスのいる世界は厳密というより緩やかになり、平行世界がつながる複雑で「不思議」な時空となった。緩やかな世界は企画段階から意図されていたのではなく、制作の過程で結果的にそうなったと考えられる。とはいえ、そうなることの種は「原点回帰」の方針にすでに内包されていたとも考えられる。

３.「原点回帰」とM78星雲

『ウルトラマンマックス』には「原点回帰」という方針が企画立ち上げの初期からあったという。「原点回帰」とは1966年の『ウルトラQ』『ウルトラマン』、1967年の『ウルトラセブン』という「ウルトラ」の「原点」への「回帰」であった。そのことは『ウルトラマンマックス』の台本の表紙に「21世紀版空想科学特撮シリーズ」と書かれていたことにも表れる。『ウルトラQ』『ウルトラマン』『ウルトラセブン』のメインタイトルには「空想科学特撮シリーズ」とあった。『ウルトラマンマックス』の台本の表紙の文字は「原点回帰」の表明であり、「「原点」の精神、創作姿勢の素晴らしさに「回帰」して、そこから新しいことへ挑戦しよう」という「「原点回帰」という意志」が込められていた（八木

2021c 108頁）。

「原点回帰」は「新しいウルトラマン」を生みだすための方法論でもあった。八木は語っている。「前作の『ウルトラマンネクサス』が当初の予定回数よりも短縮されたことを受けて、急いで次の番組の企画に入りますが、まず考えたことは、お客さんに確実にみてもらえる作品ということでした。ですから、一般のお父さんが知っているような過去のスター怪獣を登場させ、親子で観て会話をしてもらえるような方向性を目指しました。あとは、『ウルトラQ』がベースにあって成立しているシリーズであるということです。つまり、ヒーローが登場するようになる以前の要素も大切であり、面白い怪獣や宇宙人、魅力的な事件がありきなんだということですね。「原点回帰」という発想はそこからなんですが、ここでいう「原点回帰」は元に戻ることを指すのではなく、新たなものを生みだすための考え方であって、2005年における新しい魅力を探るための方法論であったわけです」（八木毅 2021d 33頁）。『ウルトラQ』をベースにした「摩訶不思議な世界」「怪獣や宇宙人が登場する世界」「魅力的な事件が起きる世界」にヒーローが現れるという初代ウルトラマンから引き継いだ世界観（八木毅編2021a 12頁参照）、それを『ウルトラマンマックス』として新しく作り上げていく。ディレクターズシステムと作家主義はそのための制作の要となった。そしてそこに金子修介発案のM78星雲出身という「縛り」となる要素が加わる。M78星雲出身のウルトラマンが戦う各話を監督たち脚本家たちで「自由に」作っていく。これが『ウルトラマンマックス』の方法であった。こうしてパラレルな世界が錯綜するドラマ、過去と現在との重層的な物語が生まれていった。

ところで、M78星雲出身という「縛り」はどのようにして「自由」と両立できたのだろうか。「縛り」は「自由」を制限することもある。M78星雲出身という「縛り」は、初代ウルトラマンからの古典的な設定であり、ウルトラマンを作ろうとするときに強い縛りとなり作用するとも考えられる。

ここで『ウルトラマンティガ』に議論を迂回させよう。というのも、1996年『ウルトラマンティガ』はM78星雲という「縛り」を取り払い「自由」を獲得した作品とみられるからだ。『ウルトラマンティガ 25年目の証言録』（立東社2021）中で八木毅は『ウルトラマンティガ』のプロデューサーを務めた笈田雅人にインタビューを行っている。その中に『ウルトラマンマックス』の「原点回帰」にふれた個所がある（八木毅編2021b 275-276頁）。

> 笈田　『ティガ』に関しては16年ぶりの作品ということで新シリーズ復活という扉を開かなければならないという時代だったので、特別な部分もあったと思います。でも『マックス』に関しては壁を突破とかではなく自然体で『Q・マン・セブン』のころの精神に近いやり方で作っていたんだろうなって思っています。シンプルにクリエイティブな作品をみんなで楽しみながら作っていくというね。
>
> 八木　そこの世界観だけは戻そうと考えていました。『ティガ』は逆に自由でM78星雲出身でさえないです。
>
> 笈田　『マックス』の原点回帰はM78に戻ったということでもあった（笑）。

笈田は『マックス』の「原点回帰」とはM78星雲にウルトラマンに戻ったことだと述べ、八木は『ウルトラマンティガ』が「自由でM78星雲の出身でさえない」と述べている。『ティガ』はM78星雲出身ではないゆえに『マックス』よりも自由だという認識がここにはみられる。だが、ことがらのさらに深層を考えることもできる。『ウルトラマンティガ』以降、「新しいウルトラマン」は2004年の『ウルトラマンネクサス』までM78星雲出身ではない。『ティガ』から『ネクサス』までをみるとき、「M78星雲出身ではないゆえの自由」のもとに作られたとすることができる。しかしその奥には「ウルトラマンはM78星雲出身ではならない」という了解が存在していたのではないだろうか。

先にも述べたが、ウルトラマンマックスをM78星雲出身とするというのは金子修介の発案だった。『ウルトラマンマックス』DVDBOX同梱のインタビューで金子は「僕は小学校6年の時に『ウルトラマン』と出会っているんだけど、当時としては『ウルトラマン』ってSFの先端にいる作品なんだと僕らは思っていました。怪獣ハンターとしてのウルトラマンがいて、そこからいろいろなストーリーが展開していくという。聞くと今はそうじゃないと。しかも平成のウルトラマンはM78星雲の出身

でもないと聞いてびっくりしたんですよ（笑）。だから、『マックス』では、もう一度かつての『ウルトラマン』の設定に戻そうと思ったわけです。あの牧歌的で自由な世界観をもった作品がやりたくて」（『ウルトラマンマックス　TV COMPLETE DVD-BOX』2012）と語っている。

ここから金子のウルトラマン観には小学校６年生の時の『ウルトラマン』体験が強烈に働いていたことがわかる。だから、金子にとっては自分がウルトラマンを作るというときに初代ウルトラマンの世界に向かうことは自然なことだったと考えられる。しかし、『ウルトラマンティガ』以降の平成ウルトラマン世代の八木にとってはどうだったのだろう。八木にとってM78星雲への回帰という提案は「新鮮」だったのではないだろうか。およそ15年後の振り返りではあるが、ふたりのやりとりをみてみよう（八木毅編2021a、72-73頁）。

金子　ウルトラマン自体は宇宙の警察官というか、犯罪者を追ってやってきたというのがもともとの設定。それって、すごい根本にあるわけでしょう。でも、運命的に次々に現れてくる怪獣をやっつけないといけない。だから怪獣の設定だよね。それは例えば、地球が天変地異の時代に入っているっていうことだったりするし、同時にがん細胞的なものとして怪獣が生まれてくるという設定も考えていました。じゃあウルトラマンはどうなのってあらためて考えると、それは当然、M78星雲から来ているんじゃないのって言ったんですけど。その辺は、平成ウルトラマンとはフリクションが起きるところですよね。八木さんは、M78星雲のウルトラマンじゃないところから仕事を始めているわけじゃない？

八木　はい。平成からやっていると、「M78星雲のウルトラマンではない新しいウルトラマン」という前提なんですね。でも監督がいかにも当たり前のように、「なぜM78星雲じゃないのか？」とおっしゃったときに、「あ、そうか」って。それでいいんだって思いました（笑）。そもそも『マックス』はそれまでの流れをリセットしようという企画だったから、平成ウルトラマンの約束にとらわれる必要もなかったんですね。

この中で八木は「前提」「約束」という言葉を使っている。およそ15年後の振り返りという点は留意すべきではあるが、「前提」「約束」という言葉は「新しいウルトラマン」を作る際には「M78星雲出身とはしない」とする暗黙の了解を指し示す。1966年の『ウルトラマン』から数えて30年後の1996年、ウルトラマンは『ウルトラマンティガ』でM78星雲という「縛り」から解き放たれ、「M78星雲のウルトラマンではない新しいウルトラマン」として生まれ変わり、「ウルトラマンはM78星雲出身でなくてよい」という「自由」を獲得した。しかし、その「自由」は「前提」「約束」となり、「M78星雲出身であってはならない」という新たな「縛り」へと転換したのではないだろうか。

だとすれば、「なぜM78星雲じゃないのか？」という金子の発言は「縛り」を解く言葉であり、八木の「あ、そうか」は「縛り」の縄が解けた瞬間を表す。『ウルトラマンティガ』に始まった「ウルトラマンはM78出身ではなくてよい」は「M78星雲出身であってはならない」と転換し、それが『ウルトラマンマックス』企画時において「M78星雲出身であってもよい」へと再転換した。そして、M78星雲も転換した。シリーズの各話を「自由に」作るためには「縛り」はできるだけ緩い方がよい。M78星雲という「縛り」は「初代ウルトラマンのM78星雲と同じでなければならない」から「初代ウルトラマンのM78星雲と同じでなくてもよい」という「緩い縛り」へと転換した。M78星雲という概念は「パラレルな世界観」に合わせて再構築された。『ウルトラマンマックス』は1966年『ウルトラマン』に棹さしながら、それに縛られない、自由な作劇が可能となった。

『ウルトラマンマックス』の「原点回帰」はウルトラマンを作ることの自由度の幅を広げた。過去のウルトラマンに戻ってもよいし戻らなくてもよい。平行する時空の間をつなげてもよいし、過去へ未来へと行き来してもよい。ウルトラマンの世界のバリエーションは格段に増す。そして、付け加えれば、『ウルトラマンマックス』の「原点回帰」という姿勢は「ウルトラマンは自由につくってよい」という新たな「原点」となって引き継がれていったと考えることができる。

４．未完のプロジェクトーつかみ取れ、未来！

『ウルトラマンマックス』の「原点回帰」はいまも続いている。

2020年『ウルトラマンＺ』第18話「2020年の再挑戦」（脚本：継田淳 監督：辻本貴則）はケムール人が再び現れる話で、監督の辻本貴則によれば1966年『ウルトラＱ』第19話「2020年の挑戦」の「続編」とされる（ウルトラマンＺ Blu-ray BOX Ⅱ同梱の作品解説書より）。2023年『ウルトラマンブレーザー』第9話「オトノホシ」(脚本：植竹須美男 監督：越知晴）は1966年『ウルトラＱ』第13話「ガラダマ」第16話「ガラモンの逆襲」につながる話で、セミ人間が再びガラモンを呼び寄せる。ウルトラマンＺはM78星雲系のウルトラマン、ウルトラマンブレーザーはM78星雲系とは違う文明の星から来たウルトラマン。『ウルトラマンＺ』と『ウルトラマンブレーザー』は世界観の設定が違うが、「ウルトラ」の「原点」である『ウルトラＱ』を参照している。「2020年の再挑戦」「オトノホシ」は「バラージの預言」「狙われない街」「怪獣は何故現れるのか」と同じ線上に位置する。

「原点回帰」によって生まれた『ウルトラマンマックス』は、今度は「新たな原点」を生み出した。「ウルトラマンマックス」というプロジェクト、過去を未来へとつなげ、未来を過去へとつなぐプロジェクトはいまも続いている。

注

(1) ウルトラマンマックスの登場には『ウルトラマンＸ』側の理由も考えられる。『ウルトラマンＸ』には異なる世界観のウルトラマンが登場するという特徴がある。『ウルトラマンＸ』第5話のウルトラマンゼロ、第8話のウルトラマンマックス、第13、14話のウルトラマンギンガとウルトラマンビクトリー、第20話のウルトラマンネクサスがそれにあたる。

(2) ただし、黒部進は『ウルトラマンレオ』第30話「日本名作シリーズ!怪獣の恩返し」では大熊シンジ役で客演している。ちなみに、大熊に助けられる怪獣の人間態は桜井浩子が演じた。

(3) ヨシナガ教授役の桜井浩子は『ウルトラＱ』では江戸川由利子役であり、第29話にも登場するが、佐原健二、西条康彦、桜井浩子の三人がそろう場面はない。

(4) ウルトラセブンのビームの追撃によってメトロン星人が爆発する「狙われた街」の映像は使用されていない。「続編」なのでメトロン星人爆発映像を使用しなかったと推察される。あるいは「狙われない街」はメトロン星人が爆死しなかったもう一つの未来の話だとしても筋は通る。

(5) 梶研吾は、監督としては『ウルトラマンマックス』からだが、それ以前に2001年『ウルトラマンコスモス』の脚本の担当経験があるので平成ウルトラマン世代の監督に分類した。

(6) 村石宏實は『ウルトラマン』『ウルトラセブン』のスタッフだが、監督としての経験は『ウルトラマンティガ』からなので平成ウルトラマン世代に分類した。

(7) 切通理作は『ウルトラマンマックス』について「過去と現在を錯綜させることも含めた「自由さ」「緩さ」によって、ウルトラマンが本来もっていた、各話の独立性が強いアンソロジーものとしてのセッションを成立させていた」（切通2021）とのべている。

参考文献・資料

宇宙船編集部編 2006『ウルトラマンマックス MAX!× 3 怪獣大画報』朝日ソノラマ

切通理作 2021「トウマ・カイトがつかみとれたもの」（『ウルトラ特撮 PERFECT MOOK vol.23 ウルトラマンマックス』所収）

八木毅編 2021a『ウルトラマンマックス　15年目の証言録』立東社

八木毅編 2021b『ウルトラマンティガ　25年目の証言録』立東社

八木毅　2021c「『ウルトラ』の教え」(『ウルトラマンマックス　15年目の証言録』所収)

八木毅　2021d「君にもみえる　ウルトラの証言」(『ウルトラ特撮 PERFECT MOOK vol.23 ウルトラマンマックス』所収)

『ウルトラ特撮 PERFECT MOOK vol.19 ウルトラマンX』講談社2021
『ウルトラ特撮 PERFECT MOOK vol.23 ウルトラマンマックス』講談社2021
『ウルトラ特撮 PERFECT MOOK vol.28 ウルトラマンコスモス』講談社 2021

映像資料

ウルトラマンDVD Vol.1,Vol.2　バンダイビジュアル 2009
ウルトラセブンDVD Vol.2　バンダイビジュアル 2009
ウルトラマンマックス TV COMPLETE DVD-BOX　バンダイビジュアル2012
ウルトラマンティガ Complete Blu-ray BOX　バンダイビジュアル2014
ウルトラマンX Blu-ray BOX Ⅰ　バンダイビジュアル2015
ウルトラマンZ Blu-ray BOX Ⅱ バンダイナムコアーツ2021
ウルトラマンブレーザー　Blu-ray BOX Ⅰ　バンダイナムコフィルムワークス2023